群教セ	M01 － 01
	平23.243集

望ましい人間関係形成力に関する調査研究

── 自尊感情・他尊感情とストレスの分析を通して ──

長期研修員　　須藤　健
高橋　洋

《研究の概要》

本研究は、児童生徒の自尊感情・他尊感情とストレスの関係を明らかにし、問題行動を事前に回避できる児童生徒の育成について考えることをねらいとした。そのために、学校での日常的な営みを多方面からとらえ直すため質問紙による調査を実施した。そこから明らかになった自尊・他尊感情とストレスの関係から、教師の支援の在り方及び効果的な場面を考え、問題行動の未然防止への取組と「豊かな心」を育成するための提言を行う。

キーワード　【豊かな心　自尊感情　他尊感情　ストレス　SOSアンケート】

Ⅰ　研究の背景と目的

1　現状と課題

(1)　先行研究の成果と課題

いじめ、犯罪の低年齢化など対人関係が希薄になっている社会において、これまで児童生徒の望ましい人間関係の育成に向けて、また、問題行動や学校不適応の未然防止に向けて様々な研究や教育活動が行われてきた。自己受容なども含めた自分自身の感じ方である自尊感情を高めるための取組や、児童生徒を取り巻く様々なストレッサー（ストレス要因）とそれによるストレス、コーピングについてなど様々である。しかし、近年の研究では、自尊感情を土台とした他尊感情を培い、その他尊感情を具体的に表す態度や行動の仕方を身に付けさせる必要があるという指摘がされており自尊感情と他者を尊重する感情である他尊感情の双方が互いに関連しているのではないか、と考えた。そして、その両者と問題行動の要因として考えられているストレスとの関連を明らかにすることが、問題行動や学校不適応などを事前に回避できる児童生徒の育成に役立つと考えた。

(2)　問題の所在

現在の日本は物質的な豊かさと社会の成熟化に伴い、家庭や地域の教育力の低下や、個人が目的意識をもったり、何かに意欲的に取り組んだりすることの難しさがある。その中で、児童生徒の学ぶ意欲や学力・体力の低下、問題行動、規範意識や倫理観の低下など多くの課題が指摘されている。これは、都市化や少子化などに起因する人間関係の希薄さと、自分さえよければいいという履き違えた個人主義の広がりなどにも原因がある。人として他と調和し、共に生きることの喜びやそのために求められる価値を重視する力、いわば望ましい人間関係を形成する力を培っていくことが、これからの課題である。

学習指導要領解説総則編では、自他の個性を尊重し、互いの身になって考え、相手のよさを見付けようと努める集団、言い換えれば、好ましい人間関係を基礎に豊かな集団生活が営まれる学級や学校の教育環境を形成することが、生徒指導の充実の基盤であり、かつ生徒指導の重要な目標の一つでもあるとしている。また、平成23年度群馬県学校教育の指針でも、「生きる力」の三要素の一つとして、自分や他人を大切にできる心や感動する心を「豊かな心」とし、豊かな心を育てるための生徒指導の充実が重点とされている。他人を思いやる心、生命や人権を尊重する心、自然や美しいものに感動する心、正義感や公正さを重んじる心を「豊かな心」と考え、児童生徒の豊かな心を育てるためには、生徒指導をはじめとする様々な場面で望ましい人間関係を築けるようにすることや、社会性を身に付けさせることが必要となる。そして、望ましい人間関係の要因となる自尊感情・他尊感情と児童生徒を取りまくストレスの関係について解明することが、問題行動の未然防止につながり、「豊かな心」を育てるための提言に結び付くと考えた。

２　研究の目的

問題行動の未然防止に向けて、児童生徒の望ましい人間関係を形成するために、群馬県教育委員会の定義(2007)による、自分自身をかけがえのない存在と認め、欠点を含めて自分自身を認め好きになる感情、である「自尊感情」と、 Hwangの定義（2000)による、全ての人間を尊敬し、受容し、思いやり、価値あるものとし、奨励すること、である「他尊感情」。そして、児童生徒を取りまく「ストレス」との関係を明らかにしたい。問題行動や学校不適応の要因は様々だが、その中でも特に「自尊感情」についてはそれを高めることにより、ポジティブな部分が促進されネガティブな部分が抑制されると考えられ積極的に行われてきた。しかし、Hwangはそれだけでは不足とし、他者との関係の中で生活するための新しい態度であるother-esteemを獲得する必要があるとし、それを他尊感情とし、それを高めることも必要であるとした。このことから、ストレッサーとそれによって引き起こされる心身の緊張状態であるストレス反応は、自尊感情・他尊感情が低い児童生徒は高くなるのではないかと考えた。以上から本調査研究は、自尊感情だけでなく自尊感情を基盤とした他尊感情についても着目し、児童生徒の内面にいかに影響を及ぼしているかを、その尺度としてストレスにも着目することで、学年差や男女差、学校規模差も含めて相関を明らかにしたい。そして、それを基にそれぞれのよさや課題を明らかにし、教師の支援の在り方及び効果的な場面や働きかけなどを考え、問題行動の未然防止への取組から「豊かな心」を育成するための提言につなげたい。

Ⅱ　仮説

児童生徒は、さまざまなストレッサーの中で生活しているが、自尊感情・他尊感情が共に高い児童生徒は、ストレッサーが少なく、ストレス反応を引き起こしにくい。

Ⅲ　調査対象

群馬県内の公立小中学校から、層化抽出法（大規模校：19学級以上　中規模校：12学級以上18学級以下　小規模校：11学級以下）により、大規模校を小・中学校それぞれ２校無作為抽出し、その児童生徒数に応じた学校数を中規模・小規模校の中から無作為抽出した。

小学校４、５、６年生と中学校２年生の児童生徒に対して、四段階評定尺度法を用いた質問紙調査を実施した。必要な標本数は、小学生660人、中学生656人である（要求精度５％、信頼率99％によるサンプル数計算による）が、学校規模間の人数バランスを考慮し、以下の通り実施した。

調査方法は質問紙によるアンケートとし、郵送にて回答の回収を行った。（調査は平成23年８月下旬から９月中旬にかけて実施）小学生2,772名、中学生1,749名から、回答を得ることができ、欠損値が多かった小学生45名、中学生 129名を除いた小学生 2,727名、中学生 1,620名の回答を分析に用いた。

Ⅳ　調査内容

調査の基本的な考え方

１　児童生徒と問題行動

最近の研究、実践では、様々なアセスメントを行って学級の風土や児童生徒の個の状態をチェックし、それに基づく対策が考えられているものが多い。しかし、児童生徒の問題行動の要因が児童生徒、教師、家庭と複雑に絡み合う中、原因追求のため教師から見た学級についての認知や児童生徒から見た学級の認知を個別の視点でとらえるだけでは問題行動を解決することは難しい。これからの生徒指導は、問題が起きにくい学校風土をつくり、児童生徒自身の力で問題を回避する能力を高めていく予防的な取組に力を入れていく必要があると考える。

(1)　問題行動とストレス

2007年からの国立教育政策研究所（以下、国研）の調査で、いじめが生まれる背景として「ストレスと友人間のトラブル」が指摘されている。「自我を傷つける様々な（勉強や人間関係上の）ストレッサーにより、ストレスが高まると、他人や自分に対するいら立ち（攻撃性）が強まる」こと

や「相手をおとしめることで自分の地位を相対的に高め、傷ついた自己の尊厳の維持や回復を図ることができ、ストレス感情を軽減できる」ことが報告されている。

(2) 問題行動と自尊感情

曽山和彦の調査(2010)では、自尊感情の高い児童はソーシャルスキルも高く、ストレス反応を感じることが少ない傾向にあることが示された。しかし、いじめに関する本間友巳の調査（2003）では、いじめ被害者は自尊感情が低く、加害者は被害経験者よりも自尊感情が高いことが指摘されている。特に、いじめ加害経験のみをもち、いじめを継続している者は、他のいじめ被害経験者やいじめ加害を経験していじめを停止した者より、自尊感情がかなり高く、加害グループ内での対人関係のよさにも支えられていることが示唆されている。

(3) 問題行動と他尊感情

石川満佐育・石隈利紀らの研究（2005）では、アサーティブな（相手を傷つけない）表現を行うためには、自尊感情だけでなく、他尊感情も高いことが重要であることが示された。また、自尊感情の高低にかかわらず、他尊感情が低い者が攻撃的な表現を示すことが明らかにされた。そして、自尊感情と他尊感情のバランスが崩れると、不適応的な行動につながる可能性を示している。

(4) 問題行動と適応感

不登校の要因として、学校や友人関係のトラブルとの関連が多くの研究者に指摘されている。野中由佳の研究(2005)では、不登校などの学校不適応傾向にある生徒は、他者や自分を否定的にとらえる傾向があることを調査で明らかにしている。また、天貝由美子(1996)は、信頼感と学校適応感との間に有意な関連があり、中学生の信頼感が、最も身近な他者である友人・教師・家族との心理的距離と相互的に関連することを指摘している。学校適応感を計る主要質問として国研は「学校が楽しい」「授業がよく分かる」「学校の友だちと何かをするのは楽しい」の三つを挙げている。

2 調査の方向性

調査研究では、児童生徒ストレッサーとして、学業、友人、教師に家庭も加えてより広く要因をとらえられるように質問紙を構成した。自尊感情・他尊感情と児童生徒のストレスがどのような相関関係になっているかをとらえることが、問題行動の未然防止につながるものと考える。さらに、その関係を具体的な学校改善のための指標として活用することができれば、児童生徒理解を深めることができ、「豊かな心」を育てることにつながると考える。

Ⅴ 調査の実施

1 調査分析の視点

(1) 質問紙

SOSアンケートは、国研の生徒指導研究センターで作成された「問題事象の未然防止に向けた生徒指導の取り組み方」(2010)で例示された質問紙例と青島朋子が作成した自尊感情尺度(2008)、石川・石隈らが作成した他尊感情尺度を参考にして基本となる項目を作成した。質問項目は、予備調査の結果を基に青島が指摘した学校で用いる尺度作成の留意点を参考にし､以下の三点を考慮した。

◎ 小学校４年生が理解でき、短時間で答えられるような言葉遣いにする。

◎ 児童生徒が質問項目を受け入れやすくするため、逆転項目を入れない。

◎ 児童生徒全体（学年や学校）の抱える課題を明らかにする目的なので無記名とする。

※ SOSアンケート： Self-esteem（自尊感情)、Other-esteem（他尊感情)、Stress（ストレス）の頭文字をつなげたもの。児童生徒の SOSサインを見逃さないという思いも込められている。以下の５観点、小学校66項目、中学校69項目で構成される。

a 学校・教師・親・友人に対する適応感アンケート(８項目)

b ストレス反応に関するアンケート（15項目）

c ストレッサーに関するアンケート（小学生15項目、中学生18項目）

d　自尊感情に関するアンケート（14項目）

e　他尊感情に関するアンケート（14項目）

(2)　データ処理の方針と分析

◎　処理方法：「 SQS学校評価支援システム」を活用する。

◎　SOSアンケートで、小学生66項目、中学生69項目の各尺度の因子構造を明らかにするために、各項目の得点結果を元に因子分析を行い、因子数を決める。（最尤法、バリマックス回転）

◎　自尊感情と他尊感情がストレスに与える影響を検討するため、それぞれを高群と低群に分け、ストレス反応、ストレッサーとの二要因分散分析を行う。

◎　学年、学校規模、男女で差が見られるかを検討するため、t検定を行い有意差を判断する。

2　調査項目の選定

因子分析用の調査項目は表１のように考え「SOSアンケート」として、四段階で回答してもらった。

表１　５観点、中学生26カテゴリー、69質問項目（部活動は中学生用の追加項目）

観　点	カテゴリー名	質　問　項　目
学校家庭適応感	学校	学校が楽しい
		この学校に通えて良かった
	友人	学校の友だちと何かをするのは楽しい
		学校の友だちとは、何でも相談できる
	教師	授業がよく分かる
		学校の先生に安心して何でも相談できる
	親	お父さんやお母さんはあなたのことが一番好きだと思う
		お父さんやお母さんには何でも話せる
ストレス反応	身体的反応	体がだるい
		頭が痛い
		気持ちが悪い
		疲れやすい
		眠れない
	不安感情	悲しい
		さびしい
		何となく、心配になる
	不機嫌感情	いらいらする
		怒りっぽい
		誰かにはらが立つ
	無気力	あまり、がんばれない
		何もやる気がしない
		勉強する気にならない
		学校に行きたくないときがある
ストレッサー	勉強関係	授業がよく分からなかった
		テストの点が思ったよりも悪かった
		授業中分からない問題をあてられた
	教師関係	先生が、理由も聞かずに怒った
		先生に話しかけても相手にしてくれなかった
		先生が、えこひいきをした
	友人関係	友だちに無視された
		友だちに仲間はずれにされた
		友だちにばかにされた
		自分のしたことで友だちからもんくを言われた
		友だちにからかわれた
		誰かにいじめられた
	家庭関係	うちの人が友だちや生活のことをうるさく言った
		うちの人が勉強するようにうるさく言った
		うちの人の期待は大きすぎると思った
	部活動	部活動の練習が厳しい
		部活動で先生や先輩からしごかれた
		部活動の先生が厳しすぎる
自尊感情	自己受容	自分のことが好き
		今の自分に満足している
		自分は、生まれてきてよかった
		生きていて、幸せだ
	自己有用	人に自慢できることがたくさんある
		自分は、いい人間だ
		自分は、みんなの役に立っている
		自分は将来、えらい人になれる
	自己効力	自分に自信がある
		自分は、やる気になれば、何でもできる
		自分の気持ちを他の人に、はっきりと伝えられる
	自己存在	たいていのことは、人と同じくらいできる
		自分は、みんなと同じくらい大切な人間である
		自分の決めたことや自分のすることを正しいと思う
他尊感情	非攻撃的	人がいやだと感じるようなことはしたくない
	誠実	人と約束したことは、必ず守る
		人の言うことは、素直に聞ける
	親切	困っている人には、自分から進んで親切にしたい
	価値	人は、みんな、それぞれ良いところがあると思う
	尊重	人が幸せそうだと自分もうれしくなる
	奨励	人が、がんばっていると、応援しようと思う
		自分は、相手と喜び合うことを大切にしている
	受容	苦手な人でもいっしょに遊べる
		人は誰でも、その人が一番活躍できる場所があると思う
		人間に生まれつきの差は、ないと思う
	許す	人は、だれでも失敗するし、失敗することは悪くない
		嫌いな人でも、すばらしいことをしたら素直に喜べる
	友好的	できるだけ多くの人と友だちになりたい

Ⅵ　研究の結果

1　自尊感情・他尊感情とストレスの関係

調査結果から、本研究で定義した学校家庭適応感について、適応感が高い児童生徒は自尊感情も高いことが明らかになった。また、他尊感情も比例して高まっていることから、バランスよく高めることがストレスコーピング力を高めストレスを回避する力につながると考える。そして、そのバランスについて考察すると図１から、自尊感情が高く他尊感情も高いＡ型は、ストレス反応もストレッサーも最も低いことが分かる。次に、自尊感情が低く他尊感情も低いＤ型は、ストレス反応もストレッサーも最も高くなっている。そして、自尊感情は高いが他尊感情が低いＢ型は、自尊感情が低く、他尊感情が高いＣ型に比べて、ストレス反応もストレッサーも低くなっていることから、研究仮説が正しいことが証明された。そして、自尊感情を高め、併わせて他尊感情もバランスよく高めることが、ストレスを回避する力につながると言える。

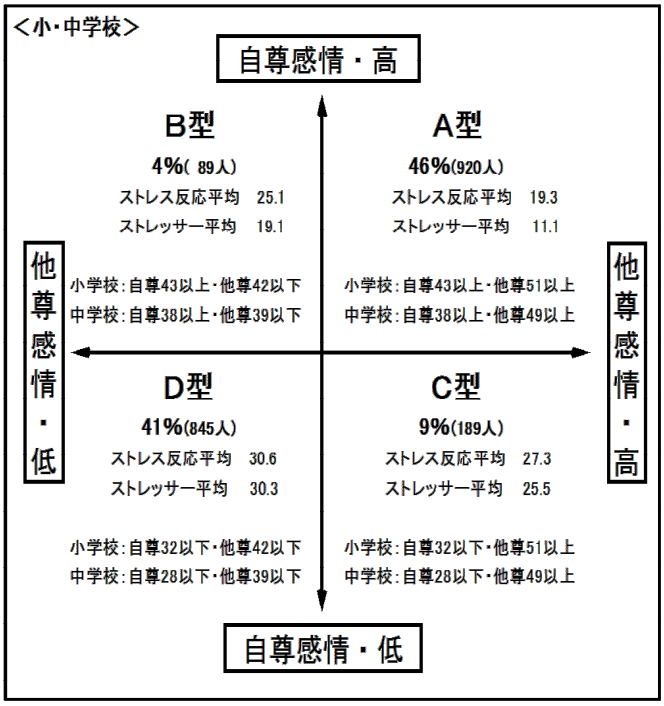

図1　自尊感情・他尊感情とストレス反応の関係

2　各尺度の傾向

(1)　学校家庭適応感

男女共に学年が進むに連れて下がっていく。 t検定の結果、小学校では、各学年で男女差が見られ、女子が有意に高かった。中学校では、男女差は見られなかった（図2)。項目別では、小中学校共に③「学校の友だちと何かをするのは楽しい」が最も高く、最も低いのは⑥「学校の先生に安心して何でも相談できる」であった（図3)。また、自尊感情と強い相関が見られた(P8図19)。

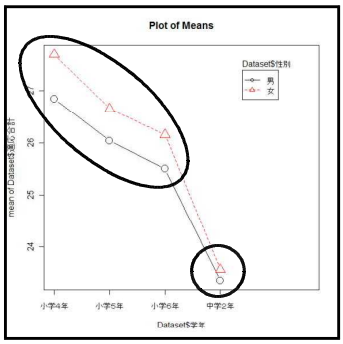

図2　学年男女別　学校家庭適応感

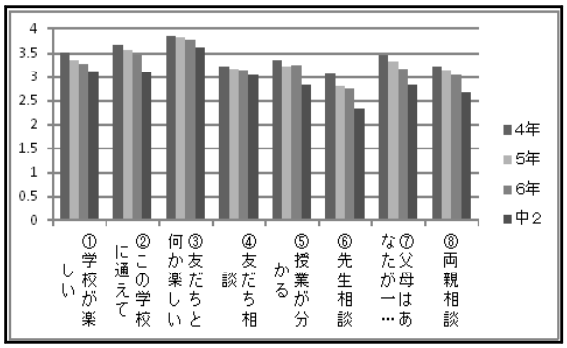

図3　学年項目別　学校家庭適応感

(2)　ストレス反応

男女共に学年が進むに連れて高くなっていく。 t検定の結果、小学校では、男子が女子より有意に高く、中学校では、逆に女子が有意に高くなっている（図4)。

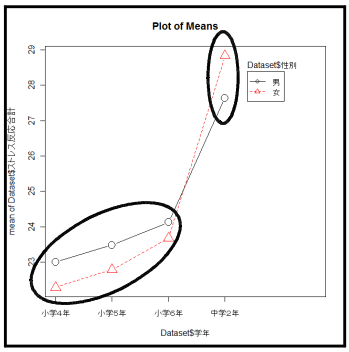

図4　学年男女別　ストレス反応

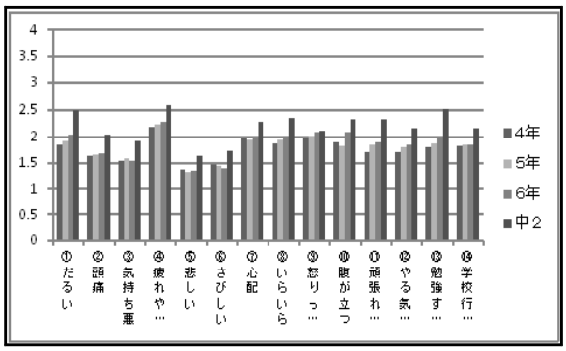

図5　学年項目別　ストレス反応

項目別では④「疲れやすい」が小学校では、平均２点を超えて最も高くなった。また、中学校は全ての項目で小学校よりかなり高くなっていて、ストレスの量が増えていることが分かる（P5図5）。

(3)　ストレッサー

学年で見ると、５年生で一度低くなるが、その後６年生、中学２年生と再び高くなっていく。男女の比較では、ストレス反応と同様に小学校では男子が女子より有意に高く、中学校では、逆に女子が有意に高くなっている（図6）。

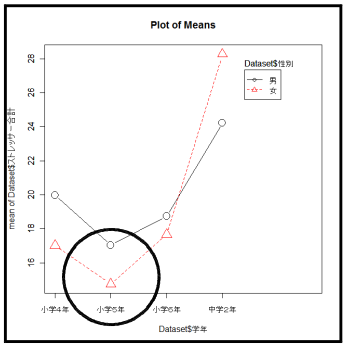

図6　学年男女別　ストレッサー

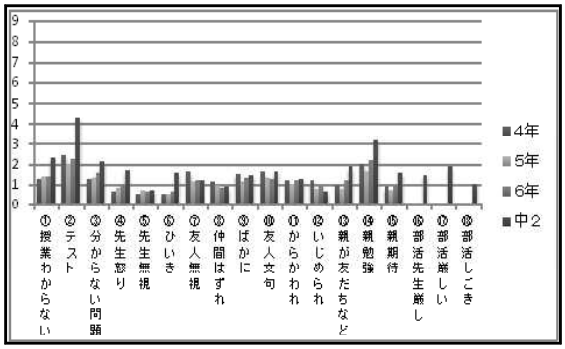

図7　学年項目別　ストレッサー

項目別に見ると、４年生では⑦「友だちに無視された」や⑫「誰かにいじめられた」など友人関係の質問で高い平均点を示したが、５・６年生では４年生よりかなり低くなっているので、友人関係の変化が５年生を境に始まると考えられる。また、５年生は⑬「うちの人が友だちや生活のことをうるさく言った」や⑮「うちの人の期待は大きすぎると思った」などの家庭関係の質問で平均点が他の学年より低くなっているのが大きな特徴である。全体では②「テストの点が思ったよりも悪かった」や⑭「うちの人が勉強するようにうるさく言った」などの勉強に関係する質問の平均点が高く、特に中学校で大きなストレッサーになっていることがはっきりと示された（図7）。

(4)　自尊感情

男女共に学年が進むに連れて得点が下がっていく。

t検定の結果、小学校では、男女差が見られず、中学校では、男子が有意に高い(図8)。

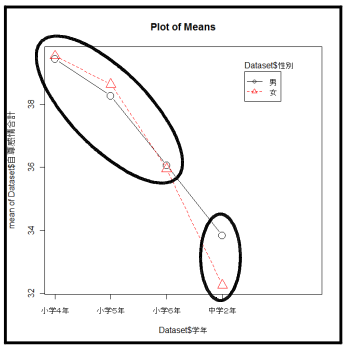

図8　学年男女別　自尊感情

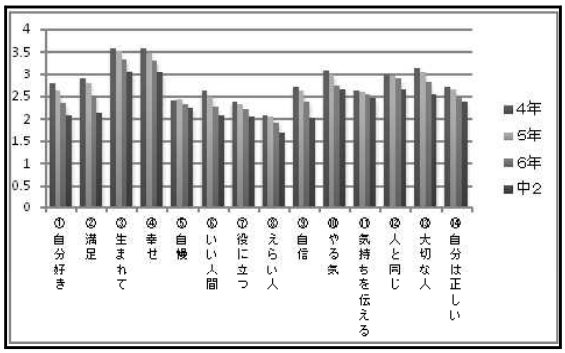

図9　学年項目別　自尊感情

項目別では③「自分は、生まれてきてよかった」や④「生きていて幸せだ」の二つの基本的な自尊感情に関する質問で、どの学年も平均点が３点を超え高かった。逆に⑧「自分は将来、えらい人になれる」や⑤「人に自慢できることがたくさんある」などの自己有用感にあたる質問で平均点が低い傾向が見られた（図9）。また、学校家庭適応感との強い相関が見られた(P8図19・20)。

(5)　他尊感情

学校家庭適応感や自尊感情と同様に男女共、学年が進むに連れて下がっていくが、平均点は自尊感情から見るとかなり高い。

t検定の結果、小中学校共に女子が有意に高かった。男子は６年生で大きく平均点を下げている（図10）。

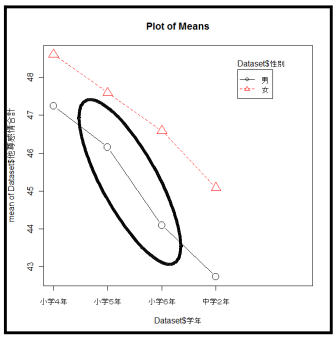

図10　学年男女別　他尊感情

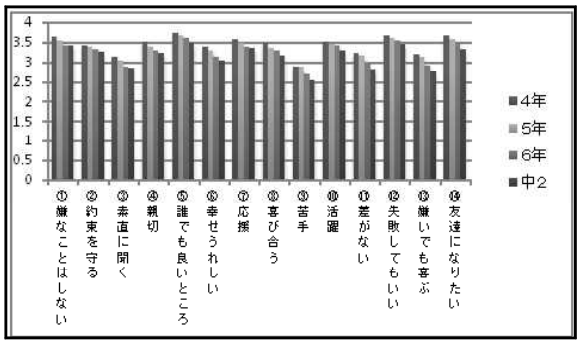

図11　学年項目別　他尊感情

項目別に見ると⑤「人は、みんな、それぞれ良いところがあると思う」と⑫「人は、だれでも失

敗するし、失敗することは悪くない」の二つが、小中学校共に高くなっている。逆に、低かったのは小中学校共に⑨「苦手な人でもいっしょに遊べる」である（P6図11）。

3　学校規模別の傾向

(1)　小学校

２要因分散分析の結果、大規模校、中規模校に有意差はなく、小規模校で、自尊感情、他尊感情が共に有意に低く、ストレス反応の得点が有意に高いことが分かった（図12. 13. 14）。

(2)　中学校

自尊感情、他尊感情では、小規模校と中規模校に有意差がなく、大規模校が有意に低かった。ストレス反応の得点は、小規模校と大規模校が中規模校より有意に高くなっている。

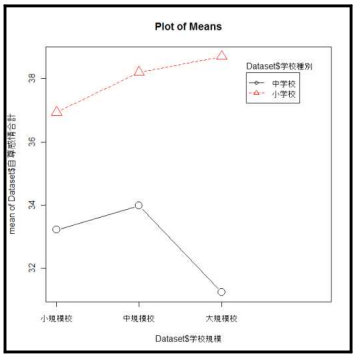

図12　規模別別　自尊感情

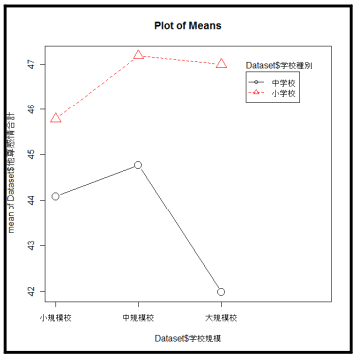

図13　規模別　他尊感情

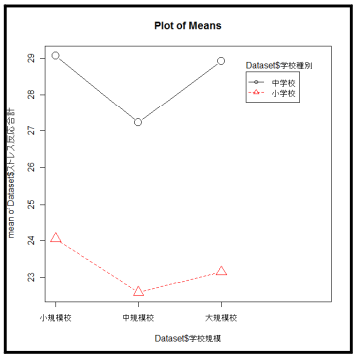

図14　規模別　ストレス反応

4　男女別の傾向

(1)　小学校

ストレス反応は⑤「悲しい」⑥「さびしい」の不安感情では、女子が高くなっている。男子は⑪「何もやる気がしない」⑫「勉強する気にならない」などの無気力が高い。男女共に④「疲れやすい」が最も高くなっている(図15)。ストレッサーでは、項目により違いが見られた。⑮「うちの人の期待は大きすぎると思った」などの家庭関係や⑥「先生が、えこひいきをした」などの教師関係の項目では、男子がかなり高くなっている。女子は②「テストの点が思ったよりも悪かった」などの勉強関係が、男子よりも高くなっている(図16)。

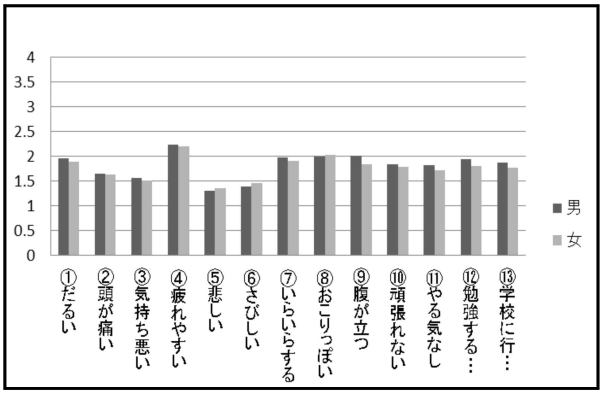

図15　小学校　項目別　ストレス反応

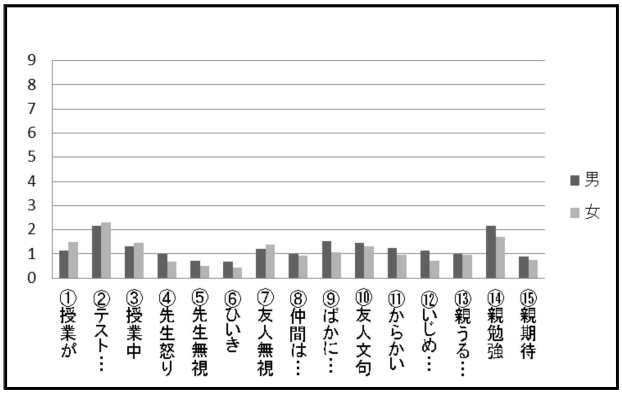

図16　小学校　項目別　ストレッサー

(2)　中学校

①「悲しい」などの不安感情と⑦「いらいらする」などの不機嫌感情では全ての項目で女子が高くなっている。⑫「勉強する気にならない」などの無気力では、男女に大きな得点の差は見られなかった(P8図17)。ストレッサーでは①「授業がよく分からなかった」などの勉強関係や⑭「うちの人が勉強するようにうるさく言った」などの家庭関係で女子がかなり高くなっている(P8図18)。

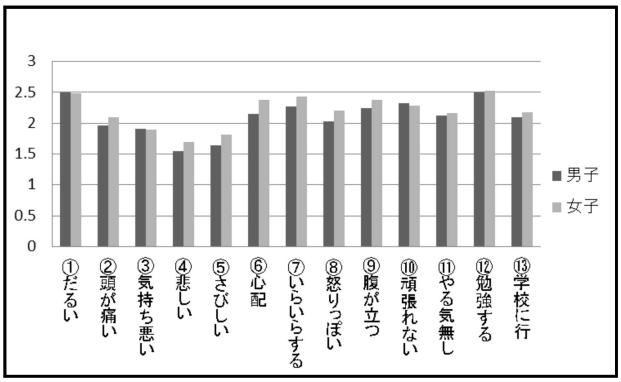

図17　中学校　項目別　ストレス反応

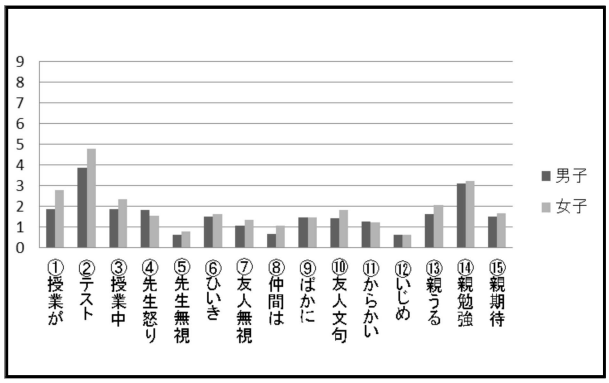

図18　中学校　項目別　ストレッサー

5　学校家庭適応感と自尊感情･他尊感情の関係

(1)　小学校

学校家庭適応感の各項目と自尊感情・他尊感情の相関を見ると、全ての項目で正の相関が認められた。特に他尊感情と学校家庭適応感の項目との正の相関が相対的に強い。つまり、他尊感情の高い児童は、教師や友人との関係がよく学校を楽しいと感じていると言える。また、自尊感情の高低と「お父さんやお母さんはあなたのことが一番好きだと思う」や「お父さんやお母さんには何でも話せる」の回答（親子関係の適応感）とに正の相関が強いことも分かった（図19）。

(2)　中学校

中学校でも全ての項目で正の相関が認められた。「学校が楽しい」と感じる生徒の要因として、他尊感情だけでなく自尊感情も強く関係していると言える。また、「学校の友だちとは何でも相談できる」と「学校の友だちと何かをするのは楽しい」が「学校が楽しい」と「この学校に通えて良かった」との比較的強い相関があり、友人との関係が学校への適応と関係していることが分かる。また、中学校でも自尊感情の高低と親子関係の適応とに正の相関が強いことが分かった（図20）。

	自尊感情	他尊感情	学校が楽しい	授業がわかる	先生に何でも相談できる	この学校に通えてよかった	友人と何かをするのは楽し	友人に何でも相談できる	両親は自分のことが好き	両親に何でも話せる
自尊感情		☆							☆	☆
他尊感情	☆		☆		☆	☆	☆	☆		
学校が楽しい		☆			☆	☆	☆			
授業がわかる										
先生に何でも相談できる		☆	☆							☆
この学校に通えてよかった		☆	☆				☆			
友人と何かをするのは楽し		☆	☆			☆		☆		
友人に何でも相談できる		☆					☆			
両親は自分のことが好き	☆									☆
両親に何でも話せる	☆				☆				☆	

図19　小学校　学校家庭適応感と自尊感情･他尊感情の相関

	自尊感情	他尊感情	学校が楽しい	授業がわかる	先生に何でも相談できる	この学校に通えてよかった	友人と何かをするのは楽し	友人に何でも相談できる	両親は自分のことが好き	両親に何でも話せる
自尊感情		☆	☆			☆			☆	☆
他尊感情	☆		☆			☆				
学校が楽しい	☆	☆				☆	☆	☆		
授業がわかる										
先生に何でも相談できる										☆
この学校に通えてよかった	☆	☆	☆				☆	☆		
友人と何かをするのは楽し			☆			☆		☆		
友人に何でも相談できる			☆			☆	☆			
両親は自分のことが好き	☆									☆
両親に何でも話せる	☆				☆				☆	

図20　中学校　学校家庭適応感と自尊感情･他尊感情の相関

図の見方

空欄：低い正の相関がある

☆：やや強い正の相関がある

以上のことを踏まえ、自尊感情・他尊感情とストレスの関係を重回帰分析し、パス図に表すと図21のような関係になった。自尊感情・他尊感情・ストレッサーの三要因は、ストレス反応を42％の率で説明でき、自尊感情・他尊感情とも、ストレス反応に対して有意な負の影響力を持つことが分かる。また、係数の大きさから自尊感情がよりストレス反応に強い影響をもつと言える。

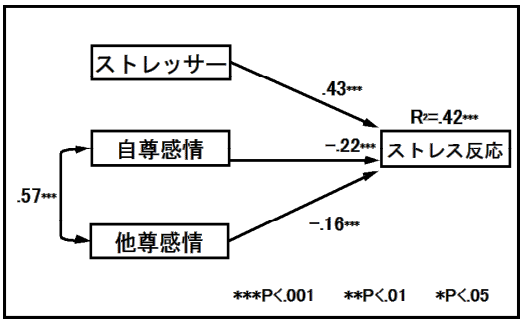

図21　パス図　自尊感情･他尊感情とストレスの相関

Ⅶ　研究の考察

自尊感情・他尊感情・ストレスの関係を独自に作成した「 SOSアンケート」を使い、群馬県の小中学校児童生徒の特徴について分析した。その結果、明らかになった主な傾向は以下の通りである。

＜小学校＞
・「学校が楽しい」と感じている児童は、「教師との関係、友人との関係がよく、この学校に通えて良かった」と感じ、自尊感情だけでなく他尊感情も高い。
・男子は「何もやる気がしない」「勉強する気にならない」などの「無気力」、女子は「さびしい」「何となく、心配になる」など「不安」のストレス反応得点が高い。
・小規模校で、自尊感情・他尊感情共に低く、ストレス反応の得点が高い。
＜中学校＞
・「学校が楽しい」と感じている生徒は、「友人との関係がよく、この学校に通えて良かった」と感じ、自尊感情だけでなく他尊感情も高い。
・女子にストレス反応の特徴があり、「いらいらする」「怒りっぽい」などの「不機嫌感情」で高く、男女で差がなく高いストレス反応は、「無気力」である。
・大規模校で、自尊感情・他尊感情が共に低く、ストレス反応の得点が高い。
＜共通＞
・「自尊感情」が高い児童生徒は、「両親との関係」がよい。

次に、主な傾向を基に小中学校の課題と支援の在り方、特に高めたい感情を以下のように考える。

＜小学校＞
○「学校が楽しい」児童を育てるには、教師や親も含めた人間関係を良好にする必要がある。
【他尊感情】
○「無気力」、「不安」のストレス反応を引き起こさないために、個に応じたきめ細かな指導をチームで行い、学校生活に対する興味関心を高める手立てが必要である。
【自尊感情】
○小規模校は、小さな集団での固定した人間関係となる。また、問題が起こってしまうと回復に時間がかかるので、互いの考え方や個性、努力を認め合える関係にする必要がある。
【自尊感情】【他尊感情】
＜中学校＞
○「学校が楽しい」生徒を育てるには、特に友人・親との関係を良好にする必要がある。
【他尊感情】
○男女共に高いストレス反応は「無気力」で、不登校・ひきこもりの要因になる可能性が高いので、自信を高めることのできる取組が必要である。【自尊感情】
○大規模校は、学年の取組や行事において一人一人が活躍する場面を設定する必要がある。また、様々な価値観や生活環境の子どもが存在するが、個に応じた生徒指導面での対応が必要である。
【自尊感情】【他尊感情】
＜共通＞
○「自尊感情」を高めるためには、家庭の協力が不可欠である。
○自尊感情だけでなく、特に男子は学校適応に関係する「他尊感情」を高めるために、他人を認める心を育てる必要がある。

Ⅷ　調査研究のまとめ

1　研究の成果

本調査研究は、自尊感情・他尊感情とストレスの関係を明らかにしその結果、自尊感情と他尊感情をバランスよく高めることが必要であることが明らかになった。そしてそれが児童生徒の望ましい人

間関係形成力を高め「豊かな心」の育成につながると考える。
そこで、以下のように５ページ図１で分類した集団のタイプ別で提言する。

提　言

問題行動の未然防止への取組から、豊かな心の育成のために

「自尊感情・他尊感情共に高めることが必要です」　※【　】の中は特に高めたい感情

◎ SOSアンケートにより、自尊感情尺度・他尊感情尺度のチェックを定期的に行い、学校や学年の特徴を知り、課題点を改善するための計画的な手立てを、学校全体で実践しましょう。
【自尊感情】【他尊感情】

◎A型の子が多い集団には、自尊感情・他尊感情共に高く良好ですがさらに伸ばすために、行事や委員会、学級の係などの活動において、リーダーとして全体のことを考えながら誰もが活躍ができるような場面を設定しましょう。【自尊感情】【他尊感情】

◎B型の子が多い集団には、行事や部活動、異学年交流など集団活動の学習を通して、経験的に対人関係を身に付けさせ、他人を認め尊重し、思いやる心を育てましょう。【他尊感情】

◎C型の子が多い集団には、「自分にはよいところがある」「やればできる」という自信が持てるようにし児童生徒の主体的な活動を促進する様な支援をしましょう。また、家庭との連携もさらに図りましょう。【自尊感情】

◎D型の子が多い集団には、自尊感情・他尊感情共に低いので、まず、あいさつなどの基本的生活習慣の確立と、異学年交流を積極的に行い、他学年と協力しながら認め、賞賛することを通して、コミュニケーション能力などの人間関係形成力を高める取組をしましょう。また、家庭との連携を強化しましょう。【自尊感情】【他尊感情】

２　研究の課題

自尊感情・他尊感情のバランスに大きな差がある児童生徒は少ないが、両者が共に低い児童生徒が全体の19％指摘されたので、その解消に向けた具体的な手立てを考える必要がある。その際、男女別、学年別のアプローチも検討する必要もある。

＜引用文献＞
・石川　満佐育・石隈　利紀・濱口　佳和　著　『他尊感情と自尊感情が自己表現に与える影響』筑波大学心理学研究第29号(2005)
・曽山　和彦　著　『児童のメンタルヘルスに影響を及ぼす要因の抽出』　名城大学教職センター紀要第7号(2010)
・本間　友巳　著　『中学生におけるいじめの停止に関連する要因といじめ加害者への対応』　教育心理学研究第48巻第１号(2003)
・青島　朋子　著　『【教師編】自尊感情尺度』　児童心理６月号臨時増刊(2008)
＜参考文献＞
・文部科学省　『中学校学習指導要領解説　総則編』(2008)
・群馬県教育委員会　『群馬県学校教育の指針』(2011)
・群馬県教育委員会　『群馬県人権教育充実指針』(2007)
・国立教育政策研究所生徒指導研究センター　『いじめ追跡調査2007-2009』(2010)
・Philip O Hwang　著　『Other-esteem:meaningful life in a multicultural society』　Accelerated Development(2000)

（担当指導主事　國峯　智）